淳情俚言

教訓女今川

義

へ 13
1325
. 2

深情俚言 女今川巻之二

第五回

斯て家内のなげき夜ましけておもまさい袖のつゆ
かわくまも五月雨ふりて水無月の過る月日ハ早けれ
ど露おれたげの呉竹のたよ〳〵と志て綱々の
備事に年寄りてけしぐい菓も呑まで人々も
一向あらずしく居るゆへ伯母のおらくいあんじて
いろ〳〵と心をつくせど中々も妾おぬきさい欲なし方

松下水流處藏書

門 へ 13
號 1825
巻 2

くらしく何もかゝえ込むつもりにておまさがな
げき目にもかけず番頭与八といつの程よりかいゝ
かはしたる中なれバおまさの父親も憂死せし也へ
将の文家中をこのましく我子のごとく大切にして
おごりをきはめおまさも兄その事に死んで志
まへバいくらいな身持よく実一邪魔になるハ金と命
をバそのしる大かたらくおもふてつい身がらの
死ぬ時ハ何方へゆきしやらん親の死ぬもあらぬ

よふな不埒をのこらく諸親類も見とのぎりなくと
方へ人来てつけりおまさハ今の内で大よろこびになるくば
づいやな人のそばにいなかくも嬉しくおもひけるしども
二年の内に兄親子のこのれ兄子離れいまだ浮世
にそなれ鳥一人こぎゆくうつろ舟恋しき人に
あはしまの去日より女雛男雛なのらしおもひ
なま中あいし相思ひ涙の身をのこここのす蛍
よりもかげれし 今もきくずきみぬる宴の月

かげだに見へぬ其人の言葉ハ耳のこりしよふで
どふぞ亀井戸へゆきしなハ又そや逢ふ事もあらん
かと父の百ケ日も程なくをぎなきたまつりも志も
ふく又く伯母そのうらも亀井戸へ御法事のおりくお
姉さ与八ハ母よろこべども表向ハ大事の志んぱふ
そのそふしく卯へやら出るそのうとおくれごのしよ
いつく居るますおぬさやろくしハ亀井戸へ御たいぬさへど
ふも文ハ思ひるいござゐますそろく志まひいど

ふなきるお宗ぐござゐますどふぞよい智恵を
咲ましく平く滝をきぬ孫ハ減ませんますへたとへ
そのよふな事ぐもそろしい智恵をのるたいとれや
ぬよむり御内の様をされといふとあますなつく
志まうよぬさへそれハあなくのお言づといといふあらぐ
よくうんずへくこらんあそぜせますへどふぞ済むうとれ
そのうハかんまんしく〳〵りや涙をせぼりく居る
ゆへおぬさ与八ハ母よろこべどもさぎれと志つこく

さて〳〵居る折から伯母ハ立出与八やおぬきどん
あれほどいやがつて居るものをむりにさせずとも
ちよつとまちがひでもあつた時ハしようがないから
マアそれよりの西へつれていつて病気もよくなつて
から後ハ縁を嫁しそのてんのゆくよふにしま
せうト亀井戸へこそつれてゆくそれより本町に
てハおぬきと与八ハ夫婦のよふにして何事も気に
この世にまするも家内の男女ともになつてくらく

むる人のこゝろくるしきおひきやらまで金を融
ハ唐物をのこしまで似せものと引かへて大金を
請のひとんで古器をうしあきないして志まひ
ける此ハ後に身をもいとみそうのくれにハ西に
の請このひこみのさいそく地めんも人手にわたし
今ハよふやく居宅斗ハ是ではなおくよきむこハ
なぬといふ内へいつその事与八ハおぬきと夫婦にし
て銀次郎をそとにして後見をさせ縁をさき

せんといふつりなれバ二人ハ互の肉身よろこびおまさ
いとうくも亭主ハそこぬゆへ地面一ヶ所をつけて
幸ひ亀井戸ハさびしきゆへ伯母と下女ニてくらす
ごよふのたふとおもむおまさハところもニ昔ニのてる
討目ざぬつりふる人もお梶忠兵衛のことく秋夕
手洞のあらくひまもなし夫よりおまさハ萩次郎
ふこゝされる身ぞハなし今ハ浮世ニすてられて
あすくいましども附く萩次郎とも数見合たびのひま

おもかげしたく思へどもおぬいといふ物もあれバ文
いつなんまなれて人に逢くせるも道ハ知れずと
萩次郎の方ニてハ誠の夫婦のかたらいを志たと
いふべくもなく云名付計りぞうき去のを行末
おまさの為めにとおもふゆへにかく一向ニだしもせず
ふいたのをたゞのれくてく病気つき了婆をそて
人にいゝされずなにあされをこよのふみ打て父
親にもたちまちなげきに若気の至るうへど言ハ

本町の身上も段々引出しやらなにやらでしまふて
ふしあはせになりおまきも昔のやうな事は引かへて何
もかもお梶とお辻二人の忠義ぶかい勤ていたる
忠兵衛の腹推やら居るは但手も出してかせいでゐる
くらしさへ今では茂次郎もふびんに思ひ折も
あらばぞふぞ本町の孫も呼て昔は本店とうやまい
志内の支今ではかねもちではなけれども茂次郎の
ぢいの時迄は家来筋の事ゆへいまふあてせず

なかもしたを見ているは道理あるまいと折くお辻
なんぞの序へ来て机んでいるとたゞ噺しのやうに
おかまさごのようすを咄している因郷へ（夜）なんど
おお隣りのおかまさんは跡をいそふでみえます
神へ（夜）そふさもちつとうちへもよんであそばせて
あげるがいゝたびくもあげますが人にあふのも
きんどうだらういやごとおつしやつてでございまして
けふは是非あまりになりたいとおつしやるを四新道

このだましたりきとのたりしておくといふ働してく
みゝますよふ苦がいそふに両親に見のれてさんざんて
わぼそいのじ手めへちつとおもしろい事でもいつてあ
まりになるきちをやむよふにしてやるどのいゝ事こそ誠
おせてたぜめんぽんに幸ひ新孝さんの来て世つて
あとの弥かておよびゆくて気をとりなおすよふに
志てあげませてあなたもどうぞ口を合せてくだ
さいましよアもんやおまさやんをむりにつれかへてきや

ハイ〳〵かしこまりましたと出て行萬次郎ハよそ
ながらおまさが噂本町のなり行など聞て志きり
にあはれに思ひおむすめをさとめて嘆子やれハおまさハ
昔に引かへて結構の衣裳に下衣ハお絹店の中から
ちりめん帯ハ唐志ゆすと繻の縫りおなしの見りの
入りしを志めて髪もうてちも重信につくろ耳でも
どこやらの匂ひぞなまるむろ咲の梅の枝志てふ
鶯の初音ゆのうきそのまゝのってつとまるほとかハ

ゆゝしおまさハ嘆しくおせ子を引寄せろう/\と泣
出来るとおぬいハこたつのそばに蔭次郎このぬいさん
をきていろ/\振るそばへ母あねりおまへ(がん)ヲヤ/\おまさどん
よくお出なさいましたサア/\家のよふござりますあつたら
ろくよいところへお出掛せへ(まま)母そのころふころのよふござりい
ますと大神のそばへさゝげるとむりにふとんの上へあげると
蔭次郎ハ烟草を呑なかのへ(蔭)おまもとさんよくおいで
だねへけふいちつくもおむよいろへ今のおきにそんなまに仏

いどもたとせる物のおこそのろ身一親子不孝にあつる
のふおぬいさへ(がん)さよふきちつと髪見せどもつんにかふ
たやアないのへ見物おまさとさんをもつれやろ/\お出掛で
せなへ(蔭)アほんにそふまるごのよこのろうおまさどん仕方
さるるへいないのへ幸ひたろうこゝろしのお振舞やま
せ(まま)母へそのぶふござい弁(ぬい)へほんに見物へあくこのよの
ろふじやアありませんろへお降へいつ/\此新造さる子
そふもう/\来りませぬ仰のとのでいるいろ/\ろうしの

いつくよくきめらく気きのくおまさせんさみしくう
くもちつきの内こたへぐもあたつくまつくお出まよ
ト嘆しづつくおばんハ隣へ出く行論午ハおまさと夜
次郎と相談もいままでおまさの龍をみく夜おまさな
ぜそんなる所ふのごハおめへ是非を言すれハこのあきさナ立
夜文ぐもいつ迄もちゞめらくあつらし人のなんぞのよふな何
ご苦労となるら志くねへがそんなる物もろくまくまで
みがいいくのよふぐもなく急仏外らかくにもきてのずふ

いなさると我身くく病気ご出やすまちつと自分
の身ら志ぶんをも気遣しく丈夫なつく親の跡
をたらくなさるご親への孝行ご清七さんの死で
論さりの甚い申へく下らく負ろもおころさんがいなさな
さるごのくもぐと本所へおめへをくでしく論いたのいの
仲くつ相くもみよふと丈くく喜信不届をおめへの方ふ
どんな事のあるこのそらしの方と何のみやらつこふ
付合も杯へよふとなつくごおやつむり縁のあつくのく

あるふゐしも内に内又変にてもおみんを世話
ふしくいる示出ならふ一所におめへと芝居へいつのふとゑ
なるほど世の中のさびめがしきハ人の行末と我の
流近だよトおまきがやさしれ姿ニ蔵次郎もほろり
とこぼせし涙さへあくまもつよきせんにもつよくと
世のたいとまぎしにいふとおりちぢめおまきが本店の娘
といふ本店風がいやさにらん志やくもおこしたお今ハ
まま川がつくよふくと下女一人を供につれて病人で

あるなのがくさまで人も付までに居るよふなかく何事も
志年に智恵もおまきがよふす志んぼうあされて
おそふなでこまごに川ゟへおみんいつていふことの通へおらくが正
嘆しきふくと咄しをしくいる色へ今ニかゝず蔵次郎ハ
本ひと我が公の内も嘆しらく嘆せんとハ思へども人の心もちのりこがらく家
を志ふくふかまろふといふ人のころきくそうも門違ひごとつまらぬ事と
おまきの志んそこ知んをおして　蔵
おまきらの口うらをきゝらんと「おまきがやマアなぜそんなに
涙をこぼしく居なさる　まき「どふも嬉しいやらこのな
志いやら思ハず涙が出ます　蔵「何がのそんなにかなし
いそへ　まき「麹町から帰りがけく跡の事を思ひ出し升と

かなしう〳〵なりません　若「そう〳〵今でハ嬉しい
かへ　まき「けふぞのりハ嬉しうございますよこれでふぞ
今夜中にしんでしまひとふございます　若「ナゼ　まき「まこと
私の願ひのかないませんうへハつまらぬも[illegible]つく人
の世話になりませうより死んでしまへバ恨みもなし
思ふ事もなう〳〵よいのろふと思ひ升よ　若「ナゼそんな
子恨ミがあるへトしぐ〳〵とふゆへ　まきハ猶も言ず
ふたゞ涙をこぼしてゐる斗へ　おかみハちうへ[illegible]しよ

ふ其せまでハ若次郎ハしらぬふりして巨燵へよりこの
かつら床乳[illegible]の髪の柳藻また〳〵屋花の紅がぶりト
唄つている所へ　旦那へござふであつたゞ目出たいおゝ
ございますね　若「たちまちなやへふいつてやろふの機変
お出来たバいひ病人をつまでもぐ〳〵のつ〳〵三日ぶ
さるのいゝサアこれから髪でもいふたろう〳〵のうモウヨタた
しハ座やしやつトこゝへあこりなんのゝ事をよんで
座ころんでいる内おかみハ枕とかいまきをもちて

まくらけなどの〳〵（めん）おまへさんも何ぞ病人らしくも
そんなつもりでハいけまいろくろくもろくしの
ちつとあげよふぐへハないの〳〵（まき）アこのふごさい升
〳〵（茂）十二サやつもりそれがいひそな頭巾でもかぶつていれ
バきれね〳〵ドヤア孫〳〵か〳〵（めん）それでもあんまりむごくと
きくろいのくおし盤を出しそくもつくあげよふ
ト櫛を直してやりいぶしてとりあげてそとゆいとく
おまきハかゞみをむこの〳〵ぞもあげてい見れぬ玉くげ

ぬくらびあいしその人のそばにいれば丈でもといふ
はいそれぬそうれのみおぬめんはよふくゆいしまい〜モシ
旦那へよく出来ましたろく孫ころちをむいてかおま
さやんちよつと茶をおくせそ旦那国手の重圏
さんによくおくきゝましやおまません〜〽ウ、髪の風が
整つくらしよふふつしたのふ義清子国手たくさんず
しぬたらふ〜それこそ讃子おぬめんさんくこしよふだ
といゝますだろふおしい娘を病人にしてく不意ぞ

〽それくでもないゝ男子をいせると息子よくなるだろふ
よ〜ほんにおまきさん誰そそいたいとても思ふ人がある
か〜こんな子ら安くするまづも〜おろく〜せきるはほ
んまふるみゝおますよ西来子喋しろくお咲きの世よ
おまきさん〜〽ぞふも何も喋るはありませんの私はそふ
男といふおいつそころそろくなりませんよ〜なんぞ
こまつて丈でもおましたら〜〽ハイ〜ぞんなるの為に
へ喋しく咲せなせへおぬめんやなんぞいせめるく咲がおいゝせ

〽おまきさん咄すもおかしいはうきもしたといいます
うそサア咄してお呼せよ〽ぞふもおのしいお前だから
〽おのしこうしてもよいぞへないのへ見こしと思ねばり
卯子呼人ハないからどんな夏でもお咄しよ〽そし
てわしがのお郎子なら新座敷へでもいきやせうこの
〽イヱあなたの志やまぐハないけれどおぬめさん
だれのもぞふぞたまつてお咄をせよ〽だれもも咄
いうしませんからサア早くお喚と行燈の火をこのきた

ても火鉢の名ハへ寄る〽アノ子見たしハちいさい時志ん
るいの内へ行約束もしておとしの之れ子先へまいり候
志らしが孫こんな子何もふきよふなのぶらて先の見好
のお弟子いまないうちで見れましてモウ訂ちを稼ぐと
いふぞこのうちついに文夜もろくもおもい手手正月も
ぬめんのよふ子でしてぞふなる夏のと思ふ内大夏
の泣ききなき目でのおなくなりおがんして論るのない
心へ内へつ之れと母親のかまを幸ひに見ていやがつ

くお出抱はまで世へ出ることも一向御法なりませぬ
道具迄うられましてその時のかなしさいつそ死ん
でども志まおふのとおもふ所に文おくりし母ごのおなく
なり担はしてそれからは誠に浮世の中ハあきくと
志ましてこれもみんな私の後生の為いのとあきらめ
てもたえ人への恋しさ今にわすれませんよと
涙をこぼしく歎しく語るを藤次郎ハ寐ながら
きゝく呉くいたものも孫せものりて幻も乱れぬる衣

のそれまでも今の身ハまゝの母が孫ゝる世の中を恨こ
らまでも今さらせんかたなくなんでもおまへさを嬉ふ
たといふぐいあかねども其店の娘ゆへよくなまよめ子
昔ひとしとれくハ同しなのまへのつき合にもちげし
まれる事のたづのうさに更ゆへ親里へかへしたのを
我のきくしとうらみるのハ訳をいはぬのをそるな
まれば今又姉さんにおりへどもも神子涙をかくしいる
おばんいそばかくカを付へおまへのおさきさんそんなに気の

よいハ事だとのうハいつてひよつと死んだらマアどふな
さるへそのきらされて男へつゝあくまいハ前へお方様
よほどしぶとものゝ旦那ハ廣く付合をなさるのにどふせん
な所へでもいゝ男を見立亭主にしよふとも好な
是での出来秀よいかしても女房をもつといふ人での
みんなそれしての世話をしてあげよふものらそんな
悋しい男の是ハうつちやつてハいゝ男で身上のいゝ
色人で情のある極な人を旦那としてやらう

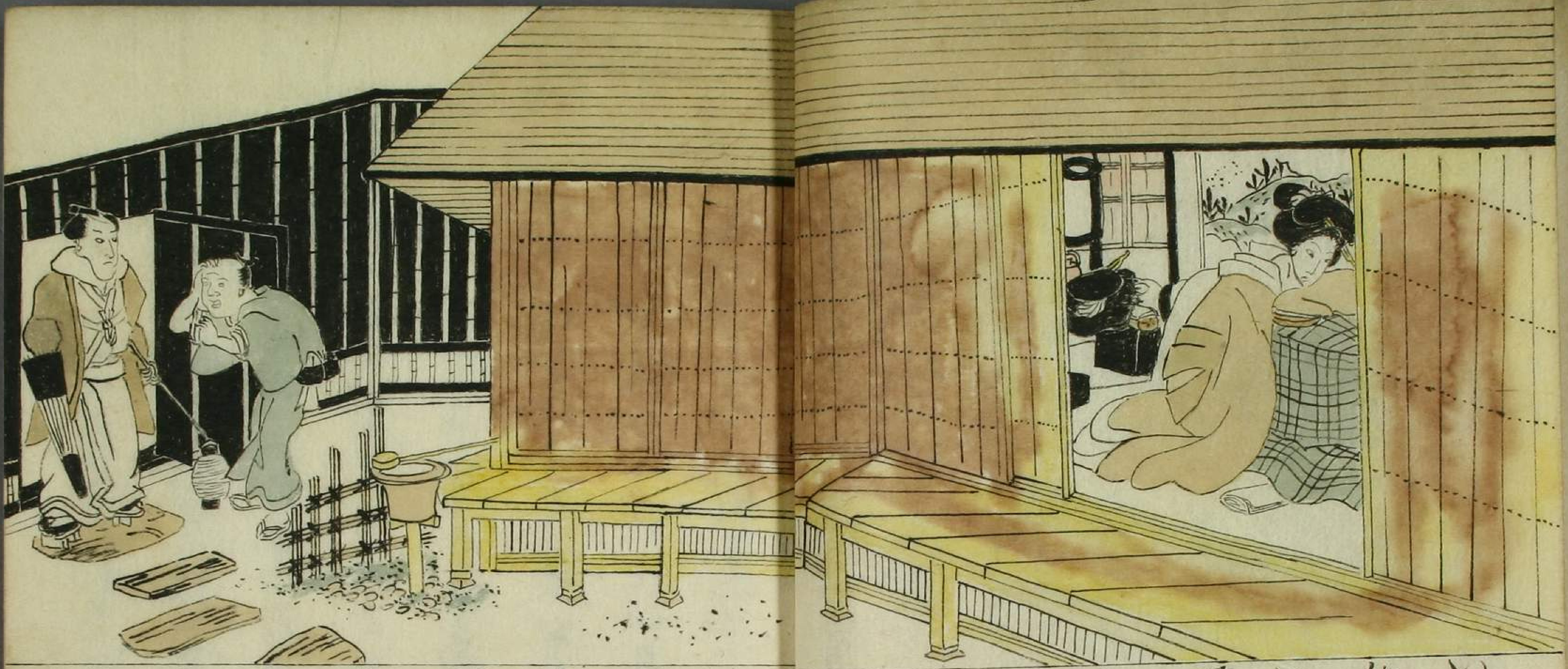
志て見たくあげよふとおもつても気をひなく
手本をもたくとおそれるよへハイおかぶさハおゝのさふ
ございますの私ハたとへどんな事での有ても卯平吉
を持事ハございませんよへソレ今ハ所もえんな姫での有る
とめの上へ下戯してゐるゆへ菊理郎ハ漸く国との芝く
娘をしてへおぬんまで髪をいつて座るとの長い
おつくりでとよつて梅幸や国十郎での菅過でも志
てハするひとハいてのげんまき志なせへそれハそふとなんで

うまいそのあとこしらへさせなおまきさん今夜ハ
こちへこまんなせへほんにおとまりなさいなへまきまへ
お世子なるぞのお床の毒でございますからへりまする
へなんのいゝ子なおぬしと二人で寝るがいひぢやねへ
今夜王手子節綱がおこのいきやまてくりハおそく
なるだろうからまつすぐ一つ吞んで先へ寝るがいい
ひトおやぢをともにつれて出て行縁エハおぬしが
まきと喋しながらへまんやおまきさんにお床を

巨燵のそばへよつて屏風をよくたてゝおまきさんの
おきもしないよふにしてあげやよ王れしも寝るから
そしてあんたのあくびハおこしてくれよそしてく
王れしハ一ッ吞んで寝るのにちよつと燗をして
くれよあんやトいふ所へおやぢハ何のぞんぶりを風
呂敷につゝんでまつさつてきておぬしさん扇子
旦那さ夜ハおとまりなさいましておつしやいますから是
ハおまきさんへおあげなさいましておまへ酒もお徳

〽婆さまお仏になされましたとおつしやりました
〽げんアイく此若旦那だのとどいつ一ツ香んなぞ薬や
ねんやとつて縮をしやトうつくしい顔で大酒を
おそいれのんでおまきのそばへ大いびきでねて
志まへバ皆々付て藤ゝ志とく　おまきハなきまなかの夜次郎がやさしき云葉
をうけしのが伊手からまろく色々と第ドウ揃たる夜も更けて弟
ゆむすぶ手枕子ゆゑも結ぶぬ閨の戸を人まつ風子おとづれており
戸をほとほとたたくゆへ次郎をおこさんと見かへれどもたまいなく藤入
しゆへあきるもあるしとをもしろくもの顔をしろく藤くいれバ
おやぢハ目がさめ志と　あやぢ〽旦那さんや　茂〽ヨイ藤むこのろふぐあ

志ゝの茂がおふくろてまらずよふつくまうトおち涙
サアくごくろふ藤さアしくト　あやぢを袖のおくへきて巨
たつへあうりほうがさして
おばんがよく藤たるようおまきゆへきくずおまきをおそもいおすひつお
つく来るゆへおまきもぜひなくひつそくれく茂次郎がのそば子だまつ
てはて此ゞつくいる〽茂　おまきハなぜそんなにだまつているまでいおまき
おそんな子悪事ごと思つて居るのの〽まきイエ　茂〽それでも
根しそふ子見ているではね袖への〽まき　そうでもトいひな
がら夢をさまぬようふましてもころくしため涙出ハ
まてひとところへをあげゆゑのと思ふやうすでござい升ト



いふ声を店毎におばゞんの咳
耳くよふきてあゝんといきを
こらへしく咳くも志らぬ藤江郎
藤「コレく坊おもちんなに泣す
いない志づのに志なせへおばゞん
お龍さんも志らいかるひとおまま
さの足へ神をあらくマアおめへ
のかもよく咳くるしお今

迄何もいらずに拵へたけれども
嘶しく咳せよふのくなのず
そもそもつところちへよつく巨
燵へあこんなせへ妻「それでも
おばゞんのひよふと藤「マアよく
訳を咳なせへ何もおめへを嫌
ふ事なぞといふらいさらく神
のおめへもちいさい附てれし

も子供の内おめへのおぢいさんとわたしのぢいさんと
様子中がよくつて約束をして云号を志て置ぶ
がおめへのおとつさんとわたしの親父と中がよく様子
親同士のよふなれども表向は本店と別家の事
だから志のつてなしに私易くまかせその私の内にはたゞの
いま一物があるよふすそれでもちいさなのいつたんや
くそく志て事ぶいうら志のつてなしにおめへを引出て
継網をやつて財におめへのおとつさんがいふにはこしやくで

うらおまさをお嫁にはならぬへといつて只上がおれ
しが商売子あつたのでゆくいろくな事はある
めへとそれから後の夏いやになつてのぶ文行末とげ
ぬを財は人の體子病を付ては身へおめへのためにも
よるしそれしが男の息子をもくのくついに一度いや
らしい事を志ては是へは娘へ縁付よふにと私を
こめし深切は実おめへを嫁くはおりはねへ事から
おこつて夏それを様子嬉ふと思つてそんなに

マアやつれる程根まらゝまるといふも様子おかのげが袖へ
志こぶそのよふ子腹へのを見るとる扉な事だの
狗ぶの一ツまいよなるよへ（まず）モウ〳〵何事も申ませんお頼ふ
ごぜいますけれどたとへどのよふにまつ〳〵捨がしても勿
体ないお娘こや事ハかしもございませんが何の因
果でございます外やら去年内へ入りまして〳〵信晴も
おまへさまの事を忘れる事もないてまうきまも
お腹捨がしまして〳〵ふが腹く〳〵ぐくてゝしのあなさ

おさへ捨がしなさいましへ（夜）さてそれがいの〳〵今夜まい
思ひをしてへつて来たのたよぶふぞで子くおめへの
病気をよくしてへ内へ入れなせへそうして〳〵迚も丈夫ふ
ハなりまへねへの〳〵いまの〳〵様の兄弟とおつて〳〵私の
身よりつてゆく末を世話をして〳〵やろふ様子もなく
いふ事を聞て〳〵いゝ男を見付て〳〵やるの〳〵そふ思つて〳〵気を
そりなおし清七さんとおもつて〳〵いなせへといふ〳〵従を
聞せくもおまさいハなんの云事ふもなく口いゝつむいて

泣居れバ嘉次郎もいまさらに思ひまはせバ思ふ程
思ひも深くしまする其の先代の約追せきたる持
病のつのるにつけてもいよ／＼嘉次郎が顔を見つめ／＼
いるゆゑへこしおまへのきし是非追ふ訳をいつくし聞せるのが
親子ながら縁へのおたゞしいいらぬ世話ごとおそふのの
何のそんな子供めしそうなおれの顔計り見ていつても
ちつとはおまへの命も出して聞せなさいへ何もそんなに歎き
急せずといふ事ばかり事を是にいくのおつしやりこのし

聞訳くハありますが何ぼあなたのお世話ぐも
ござふも因へつゝく寿を云る事ハやくござります
ゝたしく親の様ハたれがたゞるへ銀さんといふ
子のみをますこのへマアある様な事をいふ銀へ銀といふ
身がのあつくしく私を論へきつへ居るそのよく老
くりんなせへ訳をいひ聞されども涙ながらのりぐ返答
もなくいふも若しげにござふぞそんなら私の子ハ
兎くも世くハあなたのおそばに居るハなりま

せんのく銀さんをあなたのお子と思召てお世話を
被成てくださいまし　其上へあなたのお詞でもござふく
困てゐる事ハいやでござゐますト思ひ切て強くいふ
此上菊次郎も可愛そふとハ思へども今更そんなら
夫婦になつて世話をしてやろふともいはれ
ぬ仏のくるしさおばさんハ始終聞ていれといきをこら
志て麻ハ始りと志てぬふさ前お菊へでふもそんな手々
前術手な事でのりいつてハ默しての付ぬそしてく文

どふしたいといふのでこふいつてハ自惚らしいが思ふ
志と一ツ所になりたいといふのゝト聞てよふく私のいふ
まきアイ　菊おまへのよふな其うへのないものをそんな手近
志てふといふもよくく娘のハ縁をむすびてごろくのそれハ
思ても出来ね妻ハ浮世の義理といふ事をよく
汲分て見なせへそれ程おめへの志ていふのもいやだと
いふなら私への家の子ハまきおばさんへ義理のたゝぬ
と思ひますのて私ハそふく思ひ切てなりますから

何もおつしやつてくださいますなあなたのおつしやる
ことハいゝしますトぶるぶるふるへながらのくらくらんと立腹
うしろへそりかへりたおれていきハ絶にけり

第六回

在次郎ハ折をつぶしてそばにある白湯を汲んで
見てもいてまらずおまきをしつかと抱おこしあたり
まぐのる少変ふく在「おまきやおまきやト薬をのませ胸を
さすりつゝ気をたしなの子持せトいへども一向氣も

付までて手折をまきる計りなく絵方なくおぶん
をちこ手す在「コレおぶんちよつとおきなくこんなト起
き直へおぶんハ残らずまつていれども今日のさめ
ふりをしてぶん「ハイ旦那の何ぞおたのます在「マア何でも
いゝ訳ハ論ぶ出しく叱せるのく変へ手くちやく
ぞぶそいよふ手しくこんな大変じやのぶん「ヲヤおまき
せんハぞぶなまつのたへトまつていなぞのくろうそ
あきいまし志いとハ忠へども又在次郎が心の内もちま

さぞ心の内もさつしくみれバ氣の毒になりまして
子を抱ながら旦那へ申したのであります
一夜といふも色々入組ているものゝおかみでのきこうつく
内へやつた女房といふはおかみさまによそおまへを馬鹿
くしく浮気をおしかこんな痩るのでそれ程ぞ
女も今色々浮をいつてもまへ夫婦にハなら
ぬ浮気の色を立通しく内へいつて親の詞を立て
おれの事ハまてもない縁ぞと思つて辛抱なせへ

主を持まへたしも外に見る氣も浮気の一生見捨
ハせめてのことといつたのそれの氣までもさまつてそう
ぞおもろくいはず泣くだこのいさこのこ[illegible]
のだと思つているうちこんなにしんぼうしてのぞふ
ぞ承く薬を呑せてものそれも浮気へまやく
氣の付よふにしているのがいちばんなると此新造
さんに云伝の浮気へ色々もさつよふの心ぞふしく
めつてそんな変のなるものそんなあるであなた

ごあんまり志よふなるだのに可愛そふにそれで
死んでも志まつてはらん抱かせお前さんに連て行
付ますトせがましなき坊子を見せませておくあごのまゝ
やきこもちをふつて返し いゝなごのゝ〽（婦れ）おまきさん〳〵
トいひながらゝ狗をおもしろく旦那へ急渡これをおそろ
しくおもつて居ますよ二人とも菓をもりに呑
せんと思へども歯をくひしばりてちつとものどへ通らぬ
狗の門番源八郎も今更不便とて可愛そふにもいふに

いとも足ぬ此場の仕置おまんは自分の狗をあけて
おまきを志つかりと抱きながら〽（婦れ）旦那へ私のこふし
て居ますのであなた菓を呑せておあげなさい
ますよ〽（若）ヨシ〳〵ト無理に口をあけて一トロ呑せると菓の
網つてやら〽（婦れ）おまきさん〽（若）おまきやト呼声に自
しや目を開き〽（ます）ヨヤおまんさんのへといつて計りで
さも気の毒さふな顔を二人は見んで嬉しく〽（若）ヤレ〳〵
よふ〳〵気が付いてふぐ〽（婦れ）おまきさん命を助しの子

お持よ旦那の事ハもうしこのぞふぐもマアしらく言ふ
のゝ早く病気のよくなるよふにおなりよ（ます）へおぶんさん
子私ハどふも義理の合されません私ハどふぞ思ひ切て
志まいましたからおめんさん今迄あなたにおかくし申
たのハさぞお腹の立ませうと夫こそ世話になり
誠にめんぼくもございませんどふぞ堪忍しておくんさい
まし（ゑん）へ何もそんな子気の毒に思ひなんするハありま
せんよ何もかもみんな呑込んで居ますあなたこのおか

の内をさつしておくれ　涙ぐミのおかまさん私
の心ぐるしますのでちつともまよハ立ませんのゝ色を
廣くおもよトおめんの深切義理あらはれども
洞の義との間二人なかぐちのをもいはず夜明弟ハ夫人
のてまへなんと言義ふのつぎほなく（夜）へおめんやマア二人
こふしてお徳になつてくれめぐみをしてくれる恋の
夜半りぬけて来きいさむしつまらねへそのぶから
マアく今夜ハ福るものいくおまきの支度もお生でおもね子

あゝのう今迄より格別なこのたびをよくしろくあしくハ丈
芝居へでもいつくる気でもちますがいひその門にござ
るなるころ〳〵のふおかめんへさやうさおまきさせんの極
な貞女なんを廉来になさると見物ハおしつけ女の
鑑があるりますよほんにそこら中の女を喰ちらして
行義のわるいといつちやア極へ二十二おまさいおはよ一ごの一夜で
も一ツ所に寝さふといふ事ぐもありハ志めへしる廉に迄
に似得く昔風の仮名丈本のお姫さま役でハあるめへし

一度丈と云ふ人より外に丈を持ぬといふハ片意地
といふものゝよくつまらねへかせへ其の一下夜も寝
ないおんなをそれ程迄に思ふといふのハ誠の深窓で
ありますのうぞふで思ふらえ其やうに貞女婦になり
極め世事ひまゞ此新造さんも及び極しませぬら
いでハおくませんのへぐふしてそんな貞実な丈ごの
なるものゝそれハまアくぞふくもいつのう今夜ハ二人
一ツ所に寝よふでハないかの上夜源郎ハ床へはいれハ弥は

二人つれ添んと思ひたけおまきさハ氣の毒な事物も
いはずにさしうつむいていゐる顔をおゑんハあきれさえ
扨て萩次郎が男氣の㒵をつくづくおまきをさしかへて
なおさらいくらいはずともマアく今夜ハおやすみよあさ
たのむ事ハ私がなつく旦那をおもひ違いどめてあげる
からハ是のて氣を丈夫ニ持ておまちよトいゝわれておま
きハ尚丈夫ニおゑんのさまげん全てたとへどのよふなことの
事て死ねばとてもおゑんのある中へどふして萩次郎

と夫婦になられる物の㒵の間にも浮世にも
おひもなげきと里育のおゑんハこの義理深い人にめで
て漸くとおゑんさん堪忍しておくんなさいまし其實に
深切なお方と知らず今迄まことをあかしもせずいて
のいさでおまへの立ましたらば萩次郎さんの為にの方の
しゃる通りにいたしますのて此上ハ思ひませんあなた
たもそふで姉さと思召つてくだ下さいましよく
もそていてくださいます旦那も今丈夫にて夫婦になつて

通ぬといふのハほんのいひがゝり此手紙のおまへの
深切なんのあぐまハないぬのうきしのいよふ子
志らせあげるうへそんな事を案じずと今夜ハ宴
へおまへもとより自分と菊次郎さんの手中へおまへさんを一ッ所
子にはこの上ぎと菊次郎さんの心のうつるよふにいろく
志よふだんをいふて居る旦那へあなたのよふな
情なしハほんに癒い江戸でも二人ハあるまいせんよ何
のおまへでの情なしとのゝへ情ハあるさの性悪ゞに往へ

おまへさんへ何の性がるだろうハイ江戸町の訳も
よく志つておりますよそれで方容やのあの子なん
ぞハ死ぬほど惚ておまへなんしてあんなまいおん
さそのおを平村も深川へきておまへひなんして
だのて東好さんの事をいひまずしてく切ておまい
るハおまへさんのへ志れた事ゞハたとへ命をとのけて
ほきてもいれバとてく一生女房ひけしていまる
物でのいてこのげんに足をあくつて川逆ハたのひのため

又徒出してつれて来て其の親父がやかましくいうて
女房にさせる事ならバ掃へ手めへのようなやしくしれめへ
物でも掃へでかいんといふ是て来ての一生ぬけるお
其女のおりや男の一人りがいつのいせらくおいて其お
なおいハ日日にハ不足計りいふがる又いまをせらくるなせへ
うんまやくにさせるいそれよりまやくさせしてまそう
が里の竜さナアママアそれより如におゐてハ性悪るな事て
おぼへハ掃へめんエてほんまにあきれてねがしきらへの性

るがおまますその男と女とハ遠ふよふなその故
出てとおまきさんハ云名付だものりかさへ外の男ハも
たぬといふマア情の深い人のと見るとモウなきけお
か性悪での忠れなけよ夜やのましいまいコレおまきさんぶ
そしたの又おのりな彭ぶせまやくぞハないのマアく
今夜ハまんぶ客をとつてあねらをたんとてられ
やしたいめんエて忠ほくもてるよふな事をなさいますら
いきつみくおてまますよ夜おまでのかくかくおれのする事

おくさまお世話マアその気らくお茶を一ツ持て来な
嫁「イエあつのまゝい私いいやさよせつのくあつくまつい
そのを 夜「ぶ志よふなそんな事ごのみそのつまんを乾れ
この 嫁「どふぞもおしとまぎと寐く揺る迄へおまさんハ
坊ラ様子気の毒子思ひ次の道へ行那のそばから湯を
汲んで来る 嫁「おゆんさんあなたもあおり待つトいて
なかなかもいて夜次郎子湯をやる 夜「ホイくこれハ
おのりけマアよその人子湯をくませおゆんハおそろ

しくさぞるひ人このふおまきさんおめへもちつとおゆみ
よふ子なんなせへそうすると丈夫でおまへ孫へ草羽
織でもせへ 嫁「ハイおまつさんのよふな性得の情なしまハ
なのく羽二重や縮緬ではつゞきませんそれ迄へこの皃
羽織でなくつくハ今ごろハ子ふ子きれてしまハ那よ
夜「色をほくめやこのましいさへそんなむごをいつくゐる
内モウこりごのなくさなあいちつとも承いこのよこのろ
ウモウ寐なせへよトいなかく二人ハいこのなからゆめんや

孟斎

むまそぶらんきや志のゝめの鋼鳥夜もあけてくる
報ぎりてお娵んハそつと起出て二人りを襟へ寝こ
のま枕屏風をを立廻し髪を結ておくの二階へ行
菊次郎ハ志ぶ／＼起て目をさまし お娵んの起て
行しあと志らぬゆへ寝ていながら 菊〽コレお娵んや一ッ娵く
付てくんなトいふ声にかまきハ娵つと目をさまさせん
逸バお娵んハいづて菊次郎のそばて目ゟの口へふとり寝
ていゝる所へ行をつぶし返るもせずてたまつている

菊〽サア／＼一ッぷくつけ給へてお娵ん／＼ト起きよとす
かまきハ今さら／＼なまつてくもいゝ出ずせんかたなく よし〽今
お娵んさんハお出なさいませんよト起て茶を入菊次郎
おかそをみて見てそのほうて振る所へ 菊〽コレおぶん
おめへでもいゝの一ッふくつけてくんなお娵んハまア
どこへいつたのだトいふ所へかまきハこゝそばへ来て
なぞと気をてい給いはつい／＼ともふくのゝやると菊次郎
ハ夜着の中からの手を出して 菊〽一ッぷくのんで一ッぷく

そんな まき〽ハイ トまアこし一ッぷく付て菊次郎の顔を見ぬ
やうにして出す思 菊〽コウおまきなぜそんなにそうつ
むつゝかしく計りしているへ まき〽それでもどふも私はどふも
お岸の毒でなりませんもの 菊〽何がそんなに気の毒
だへ夫がしのゝ病気になるよそれはそうとマア此間は
ぶなつて まき〽ハイ与八とお妙さんと夫婦になりまし
て銀坊をそりやるといふ事でございます 菊〽ちつ
ともそんならきゝもしいしつぶの地面もよこへ

やつといふ事だのほんに 菊〽ハイほんとうでござ
います私の化粧料などのこらず海へそんな
しかたの事でいましたか金三郎といふ人や与八お
そのいふよふにしまつてといふ事でございます
今は見世などのり人もなくなつて但人夫子は銀坊と乳
母と小僧などのり昔の人は居りもしませんよ 菊〽ハテ
気の毒なそれでは夫もそんなおあつかひのあるいのさ
しかたがない金さんとやらはおあへて注揚惣て

孫にそふざますおめへの方で嬉しくてならんござこのら
やけをおこしてつのひさんぐいといふ事でござりますふも
仕方ハござりません夜ハいつても仕方ハねへのさ何でも
まつしの事ふべいつてよのふす本所へおめへのいつて錦坊
を内へおいてアノ吉八とお娘さんすいとまをやりて解
をきつてえのよふすさせると思おさまるたちなんぐ
そふ志なせへ イエ私ハたとへ命をすてゝもあな
たのおつしやる事ハそむくのハござりませぬの此事

むのりハとふもいやでござりますへ夜ハとこと経事を
汲ていつて吹せるのをいやだといふハまことでござの
いの孫へのうちおれも可愛そふだと思ふのいふの
ござりますおめへのおやじハのけのまハりの孫へそういふだから
おまきさんお世話とおもふだろふが此のお主人おめへのた
めだのといふのだそれをもまつしの事をきいてのほか
主人の事なんならばふぐも志なせへといふとの一思ひ
いやだといふのも無理だアノ孫へのつなぎでもを

たつた事まづ〳〵思ひなさんな　ヘエモウあなたのいふ
ございます何のかのを云ますがそのおぬいさん
の深切なモウ〳〵私ハ思ふいつたらよのろく　ト
涙ハ袖にかくせどもあまりておちる泪の止める
手もなしのつら拝がひ蔭次郎ハ見るめもいまさら
いぢらしくぬびんに思ふて深切になるほど男の
心づくしがおまきと一向訳なしに思ひ案事をとつて
たくる心の中へ見るも見ぬふりいやましに不覚く

おやと思ふまで涙をこぼしてせきしだるいおまきハ
隠して蔭次郎が男気の嘆しさを咲ておぬいが手前
義理を立夫婦になつてと云ふ事も浮世の義理
ませめましていはぬいふまます思ひ二人りが顔を
見合してあをもいはずいたり向おぬいを跡たりハ
どこへ行しの事が目出でかくておぬいハ髪をかいまぎひきつと
うらのみの目のくのぞいてゐれハ
蔭次郎ハ家の亡子もまぬ顔してゐるよふにて又おまきハとふく〳〵離れ
うつむいてなみだぐみまな紙を引裂りてつまらぬ顔をしている
ゆへおぬいハあきれて入りせつのくおまきをとつく〳〵計りはまくおもひなかも
そやうのよらちのあのない事がいあるところおいひながら

〽(娘)ほんや面白のお目のさめて、のくらのひを捨て
まなかまきさんにハ湯のよのふトいなのく妻を
かけうくのこをぬる也へ夜次郎ハおまきとさむらい
なのも、やらしい事も志ないのそおめんがなんとの
おりふと先をくりく〽(娘)おめんハ今迄何をしく
いさつきこのくうのひを志くいと思つくもつた
しも志極へのく田舎とのお初会そいつくよふき細
茅汁りのんぐいく〽(娘)そくこのへ来くしも髪のよるく

なつくゆつく居ましく〽(夜)扨何のよるく志やれ
らア芝居へ行く〱おかさんの母子志やれぞとも
いらな〽(娘)そうつく〱是なつく音羽屋の成田屋を
まよせるつもりき〽(夜)エウ夫よりもののんざへいつく
芝翫子でも見せれバいく〽(娘)いやくあんなやつ子見ら
並くハおかたまりハ猫へ〽(まき)さよふき私たの内へ来く
お出なさいまくアノ金〱娘さんといふへ子よくまて
居ますとのあんな役者をひいきにする人このみくま

しよふての孫へ 婆「ありやまアしつのもうつくしい娘の
今まではやりこいといふ事じや めん「ほんにまあ嫁入する今まで
なくも芸妓子やる事は孫へ纳戸の九歳子なら
ぎいめんいつ孫おまきさん まき「全く母さん子まするが
のくるもいやでござりますよ 婆「うそだてのりさそ
来しのみくけふハかんざしさされハよのつくのふ めん「アノ
おまきさんも羽織着ての まき「いつへ見しハたれもいや
でござりますよ めん「男羽織ぞのりのへそふいつても男

羽織は色男で着ますよ私なんぞは孫つのしなん
とも思ひませんよあんないじきくなはきついきら
いぶよ 婆「それおしのつよい事ぞあり おれなぞにこそ孫
めへのよふな草羽織を世話をしてやるきハ めん「きらい
お世話ぐし事はそうして男羽織モウ支度をしてもいゝ
ではありませんの 婆「いゝこふせいお急ぎこのお座敷
羽ぐハ着る時前のくいの孫へつぐもいゝじやアねへ
このコレおまきさん菜ぐもたんとのんで志づのよ

支度をさせへやるにハちよつと新孝さんの所へ
いつてきなせへあつちへいきやせうコレおむすめさんをも
出してやんなへハイ〳〵トいふので下着ハ結城の
格子縞に上着ハおなじくあいミぢん帯ハ博多羽をりハ
黒ちりめんほんときまりて出る次に繻子ハ娘
たりが支度をせんとおまさハ継の山まゆいりのつい
あけ繻絆子下着ハ綿ちりめん二ツ上着ハ小紋ちりめんの
山まゆ江戸づまをよくそめて紋のもよふ帯ハ

黒びろうどに継のごろふくのうらおびお娘んを
継縞縮のついた襦袢小紋ちりめんの上へ小紋二ツ帯ハ
黒ごろふくをハ娘さんハ支度しまくいる所へ隣りより
もおかくのちやをしてお梶も来り娘コレハ〳〵おかよふ
お支度の出来ましたハ舟ハ娘きや町河岸迄
いくのよのかしと支度も出来て行着座町橋
座方へ入り茶やが桟敷橋座の一寸客なれハ女房
ちどめはし亭主出てあいさつしまづ子まわし二階へ座

やしお茶よたなどことさでめく円をやまくのあくと
見へてしら母の柏子木の壱チヨンしと夜明て太鼓
おかめんハ楼家へ行んと急ぐ也へ菊次郎もぜひなく桟
敷へ行見物をぞなしにける

第七回

近頃何のしこぎまつてして酒ハせずして酒ま稀なるを
酒なぞのみて酒ぬ都なる芝居見物ニハよく人情を
うのちしおかるく戯(げ)きとのるの色をも和げ向ふ
鉢巻の氣をひきも洞を穿ちてるハ只俳優(やくしや)の徳
にぞありける斯くて菊次郎おかめんおかまさ杯ハ行司もな
しく終日(ひねもす)見物して居たりしが殊の外大入にてあれば
さうく幸日もまづ今日ハ是ぎりと出すに留場藤
かんてら(留場の役者を西の方をおくりにつける柄のこともさう)を持て茶屋迄送り来る
茶屋ハ橋屋にてありし表二階にて大勢酒宴の内菊次郎
ハ大かたひよろく　菊「コウ留場若と大橋の親玉を呼にやつて
おさふさうしの　茶屋男「ハイ只今お出なさいますトいつもなかし

ごのくらゐへまゐる〳〵旦那がのお侍の子らくございます
ト紫太夫へ若き付そひ紫若海老蔵ハかつて付の衣
たせもまつれ菊次郎太夫笛瑞菜浩亀安本戸藝
者藤吉郎与三郎菊八次郎菊なぞ大勢新子町二
三人引連れぞや〳〵と入りまゐり（禿）〽旦那今晩ハあのの
たふございます紫若ハきげんよふ（夜）〽アイ〳〵太夫さん今
夜ハ格別お骨折ぐ〳〵樣嶌なぞのおもの出なるま
いなあいくさ新さんサア〳〵一ッ呑なせへ（弟）〽ハイ〳〵これハありがの

たふございますト盃のかずもめぐる〳〵や冬の夜も何の
いろ〳〵おもしろく〳〵ふらち侍のゝ太夫が〽旦那又
すりこのりましたねどころ〳〵趣出しく〳〵お出なされました
（夜）〽何のを（紫若）〽何をと志〳〵をきるだけまつくらい（夜）〽ヤアこいつ
ハおそれるなんなおもしろい事ならいひの太夫遠ぶ（太夫）〽サン
ノ又久しいとんぐ喰ひちら〳〵のをなさると最愛のふらふ
ございますぜへ（夜）〽ほんとうにちつともそ思やアてら付を
志る事も極へ（弟）〽コリヤアうけ合まへひよくおてら付を

なさく〳〵ずはおきなさりませふなこう〳〵ウ菊公〔菊治〕〳〵お福
くおでゝ付而のひとりかおまゝ稀なさるだらうトおまさ
を菊次郎のいふごと思ひ大勢口ゝ子菊治郎をいぢめ
るやらけきげん私ゝ子紫若三郎も笑つゝ居る門例
の菊治郎の三味線ゝ成太郎菊ハのいろ〳〵お娘り
こゑいろをしゝ具をきゆる子おまさハ物をもいはず
お娘んのそばにちいさくなつゝ居る〔紫若〕〳〵モシあなたひとつ
いたゞきませうトいゝければ〔菊〕〳〵アノ子ハ病人だからいゝ酒ハ

吞めへませんとは紫若さん子やんなせへ〔おまさ〕〳〵ハイトおまさのし
そふ子そつと盃を菊治郎へさす其そばにこの菊治郎
者をいふつゝやるを付人ぐへお娘んおまさ伯母の薬
飲ゝ子花をやる諸々挨拶おまさり〔三郎〕〳〵モシ旦那菊治
郎子汁りお盃をつのハさればゝ私子ハ〔菊〕〳〵女どふせん
たのらよ〔三郎〕〳〵それもさうさ神へモシ旦那菊ハのけはでハ
菊治郎さんのこゑいろハきつハそのゞござります〔菊〕〳〵ハイ
そのそれハ何ぞ一つ神ぶらうお娘んなんの所のよそのあふ

おめへたちなんぞも梅ざんなせへ〳〵菊八さんなんでも
よいのをひとつおつけなせへ菊八〽そんならお笑ひ草子
一ッやりませふ小三さんうしろをおさへのこやーやれ小三郎〽アイ
ト梅屋小三郎三味せんを弾き唄ふ〽きのふよりけふは思ひのます鏡二上り〽鏡に
うつる我姿替りもそしら人のかたちへどのよふにきから
されどもつまとさだまる新造さんぞふしておあひ
きらもませうぞいナア〽イヨ〳〵大和屋アリ友〽なるほど
菊めへ〳〵よくあんないをのことんぶめんや〽ほんにまあおめ

〳〵唄ましたな夫さんは誠にまうつしでござい
ます梅〳〵まさ〽モウ一ッお稽ぶりやーなさいます梅〳〵友〽ウイ
そんならそひとつ菊八〽四若号なのく小三さんそふ
一ッお影ひや弥よろ〽そのや思ふとどふ今あゝコハ〽おゝた
かれたのぢ口おかいと思ふくなくらるみハかくごのぶし
のつまならのくじーく比志のへハせまやなくぬたへ
いやい川竹の流の身のてもこの里の女郎のいきじ
ハヰヨりの志つく飛るお前の〳〵よそや付候されも

かひないかゞハやつぱり片思ひか、しかしあ孫とまりさん
まゝのほんに志よふしな新造衆志や玉いなアヽ 諸「イヨヽ文
大和やアリ 夜「イヤモウなんしんくもの真子蔵之郎
ゝ掛合てそれハ何をやるのよのふ下女より寝若海
老婆の方姑りまてくいろくおもしろき真志つくし
夜もふけまゝますそれや八ツの鐘ひゞきて聞ゆる夜
次郎八ハ氣をきくの世 夜「サアヽモウくたりや志やうえんな
又あしたのつゝのろかお姑んお新造さんやおまきさんも

さだめし鴛ぶとんのうへ 姑「おまきさんハもふつくふさい
ぶ三るこのろうの大勢さらく上あるくはよふのよ
かろうでハありませんか人通りハなしどんな形でもよい
からあるきしますよ 蔵「ハよしませふ ふらく「さやうサ孫へ郎て
なぐさミになつてあるく方がよいのろうノウおまき ます「ハイ
そうしハゞふぐもよふござります 夜「それならそんなら
きくハなしそふまゐるのよのろうし 寝若「さやうなら皆様さん
よふございますそれ又いらつ志やいまし 夜「そふそう ちゝハこれめく

こちらさまの門弟亀井戸で年忘れ弟子衆をあつめる
つもりでこちらの附合は仲間中のこらず来てくんなせへ
一人でも不足ではなくて師匠へこんなお願へなちの志つて居る
趣向のりでまづ桜川新孝式部小路の湯文柳奥古志
両国の松暁君鳩町の九正などゝいふ連中らよつぴて
呑明しやうとやらへ 夜「それはおそろしふございます」ト海老蔵 若次郎
お耳へ口 帝「モシ貝ぬよつぽどきれいなものぢや師匠へおなん
さんのことそれではございませんのト物ひそひそのきゝ自の 夜「まつて師匠さしあげまするへ」 帝

めつたの世界中へいろをこしらへるぞんざいらん人でもそん
なぶいろふと思ふぶいろうの大立変な話ぶいらさうだり
おもしろくないさへ 夜「コリヤアちつといひ話のくらいノウ
成田屋 帝「人の変はうつちやつて置ごのよふござりやすが
面白くも師匠事のござりますその澄極った
このいい子目をとぼく卸しておりますへ 夜「やそのまゝいい内でも
都でもよくいじめられるものでこんならまら師匠へ変は
師へ 帝「さようさそふも出のせいでもろく志のさお師匠へうまい

和をおあがつて跡ハどふぐもいぢめらまする和せよ嬉しく
嬉しくいる内おばんおまきおらくハ支度の出来ると
見へて惠子頭巾をかぶつて下へおり惠座中へいと来
こひをする橋やを御嬉しくそ口返送りさよふなら
出機げんよふトあいさつをする子殿と御弟八ホハ供を
しく行橋屋のおり者てちんを見しく先へ立出
橋屋 ハさやうなら且那出機嫌よふぞふで又お近い内出見
和子へ参りやいましトいふを名残をがやしく立出く

判のたつるるなくあるむとてもなく立川の流をたへ
せぬちりハあれど浮世の義理をへぶくらまさよふく
あるむ様との箕ハモミ且那へいけるる三郎さんをおやなお
まつて弟ハけつしてそのぐござゐいます孫夜ハそふせ
あれハ壹り眼子ハ孫へつよさるお屋敷のお国から出る
のぶじの気子いそくやるまくの筆大いりき私もぞふそほし
うござゐますうらげんや衣のまそいてら角の構ハ
何ぐもやろくのぞふもあれハやらまさ孫へといひなさり

やした〈菱〉へそんならほしいのアノ古くてもよくバ下郎やろふ
〈蔦八〉へほんにこれはごさいますその古いのハさぞへよくこど
つける男がいへ〈菱〉内证沙汰なら此方へ入りて持て行がいい
おぬんアノ古いのが亀井戸村のさ(ろ)ふのこ〈ぬん〉へアイそふでおますし
なよへ〈菱〉ついでに金華のこ夜提とちよつこふうこの帯
も内へもつて出しておきなへ〈ぬれ〉ハイかしこまりましたし
私ハ此新造さんにちつとお出しの五節をおまきさん
ハぬらしてお梶どん一人ではあぶないから見ねちつ

とおたのミ申ますよ〈菱〉へそれぢやら嫁御のいふといつて
のぢやろく道中がい出しをせずとも内へいつてある
アとをなすがいいびぢやア孫への其様やその出妻
に出さしやるのそふせふしなくせずともいい夜へ〈ぬん〉へそ
出てはも合ふがなくつくいはる、夫ぢやおまちますよト 〈むすめおまきを〉
菱次郎がそぶへ二つ付らくもるこのさきへろく仙母と何たるをなすやら出ち
く出しなかつ行菱次郎ハむすめおぬんがおまきをそぶへ寄たがるのハ
若この悪このと二筋ぞいやとも〈菱〉
いはれず一ッ身ならんゆくへコレおまきやおつの子あるきしなせへ
おそろしくせつなそふぢやらがここぞへ体をの付たいのモウ

今晩からハもうこれも薬ハなしにしてしまつてそんで
夜明迄手やアぞうのこらずふきつくだろう薬八や
成右衛門の大めいわくぢ（薬八）何の私共ハつ孫の事ぢやから
なんとも思ひませぬ（成右衛門）マアくずいぶんお静かにあるき
なさいまし久しい㕝病気ぢやそれゆゑござりますのぢや
アノ大風が吹てからお力を落しなさるようでござい
ます（薬八）モシ何の㕝病気でござります（夜）それさあれ
庶幾ひどくそうよ（成右衛門）それハいつまでも旦那の心痛治るなく

ツちやア少年様ハござりますめへ（ト二百ほどのふまぶ）（夜）どふしてく
おいらたちのような衍の子医者でハなきのくよくある
こつちやア祢への手へ（薬八）イエくそふでハござりやせめへ（夜）実
の事よ（成右衛門）私も此次の世にハ女子生れてをもいれ人の云
事を聞て男子こんなほどこしくを次の世にまで
男子こんぶに生れて旦那のような子女子ほかれからぬるやふ
子志よふト左右しなかく大男ひとり付そへて御井戸の別荘へおもきつかしのどをさんくとたく行桟よやさのく熊子笛を
子孫に親父ハ出入門をあけ なかくねぼけてこそまく（親父）おかへりなさいましたらモウ夜

あけぐもござりませうにとんだにゆめうつゝでござりま
した 夜〽さてまちつとまぎれたらう大きにおそくなつて
娘御のつれろう マア〳〵みんなのあのんなせへおまき
さんはさぞおよろこびだらう おむすめん お湯でもあげなせへ
娘〽ハイ〳〵おまきさん おまへもちつとあがるくば菓子おあがりさん
やはらかへどうぞ いひくらふとんを巨燵のそばへ志いてやろ
な まき〽モシあのまいなさいますななまきモウどこも何にも
ございません私ハどうぞれハ志ませんよかなしづかにおかまい

なさいますなへ 夜〽コウみんな一ツ呑せてへお何ぞでも
その親父 娘〽ハイお留守新孝さんの所で何の事つ
ろ居りまして 夜〽それハおぬしぶも新孝さんハあまり
おぶにはサア〳〵おく出はそのいひおまきさんハ巨燵へでも
まいつてみんなの酒を呑ねを見なせへ 足のいたむ
かへ まき〽イヤモ生れてはじめてのくぎやうでさふ
芝居なればこそあるきなれぬつらふ 娘〽ほんにまきよく
おあるきなさいましたねへ 〽よくおあるきなさいます時私も

ハお帳といふしませふ（夜）何の今晩からかゝる支度の有物か
氣のきいた化物ハ足を洗つて引込む時分じや何のな
くともあつ娘がモウ一ツ呑でいる間にやア夜の明るから
そろしく船がくるからひ（三郎）きさ振ならる間に志てこのま
志く一ツのめの若草といふしませうト又ヽ酒支度してまつ大
さわぎしてあそくその夜ハ
明し皆ヽ亀井戸ならさこね志く次の日
夜次郎がおどろきて船に京堀町へたちかへりぬ

教訓女今川巻之二終